

学校教育目標 「豊かな心と体を鍛え、仲間とともにたくましく生きる力を育てる」

学校だより



～いいこと つづけよう～

令和8年1月29日
第9号

〒078-8238
旭川市豊岡8条6丁目
☎33-5853

自然の厳しさと子どもたち

校長 北島 裕二

何度も旭川の冬を経験して慣れてはいるはずなのですが、やはりこの時期は寒さが身にしみます。朝の気温が氷点下20度に迫る日も何度かあり、旭川市江丹別や占冠村では最低気温が氷点下28度を下回るなど、自然の厳しさや過酷さを痛感させられます。

子どもたちにとってこうした寒さは、旭川で生活する上である程度は仕方のないものだと思うのですが、あくまで子どもであるため、大人と比べて想像力が乏しい場合があります。帽子や手袋を身に付けずに何十分も歩いてくると、場合によっては指先や耳などの凍傷の恐れがあるため、保護者の皆様におかれましては、お子様の登校の際は外の状況を確認していただき、それに見合った、もしくは子どもが寒さに耐えられるような衣服等の準備、また極寒期は十分気をつけて登下校するようお願いさせるなどの対応をよろしくお願いいたします。



自然の厳しさといえば、冬の寒気や荒天、また地震や雷、夏・秋の台風などのほかに、火山の噴火もあります。学校では、教員などが子どもたちに定期的に読み聞かせを行っているのですが、今月、私は5年生に三浦綾子の「泥流地帯」を読み聞かせしました。

このお話は、大正15年（1926年）5月に十勝岳が大噴火し、溶岩が山の雪を溶かしながら流れる泥流が上富良野や美瑛の集落を襲い、およそ140人ももの尊い命が奪われるという大災害の前後のことについて、実話に基づいて描かれたフィクションです。読み聞かせの時間は10分ほどしかないので、400ページを超える小説のうち、紹介したのはクライマックスの10ページほどでした。

子どもたちを前に読み進めるうちに、逃げまどう人々の前に泥流が迫ってくる凄絶な描写に、私は東日本大震災の際に見た恐ろしい津波の映像が脳裏に浮かび、家族や親しい人々が泥流に飲み込まれる記述と相まって、気付くと流れそうな涙を必死にこらえながら読むという状況になってしまいました。

今からたった100年ほど前に、旭川の隣の美瑛や上富良野でこのような悲惨な出来事があったことや、その悲しみを乗り越えるべく歯を食いしばって生きた人々がいたことが思い浮かびます。国や自治体によって二度と悲惨なことが起きないように大規模な防災対策が施されたことや、時の流れとともにこの災害が人々の記憶から薄れつつある現実など、様々な状況を経て今があるのだということを思い知らされました。改めて、私たちは自然の厳しさ（と優しさ…）の上で生かされているのだと痛感し、そのこと的一端でも、高学年の子どもたちに感じ取ってほしいという願いを込めて、読み聞かせをしました。それと、三浦綾子という数々のベストセラーを生み出した小説家がこの旭川にいたことを知ってほしいという思いも込めました。皆様にも、改めて「泥流地帯」「氷点」「塩狩峠」などをお読みいただき、昔、この地に生きた人々の姿に思いをはせていただければと思います。

余談が過ぎましたが、皆様におかれましては今後とも、本校の教育活動にご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

